

本

心		理
號冊	頁記	號音
六	一	三
學校	縣中	滋賀

五号

西洋哲學講義

井上哲次郎講述

卷二

月	日	種別	種別	種別	種別
		130	745	Vol 2	

井上哲次郎講述

卷二

西洋哲學講義

明治十六年四月廿七日版權免許

西洋哲學講義目次

卷之二

第六回

第二期

ソクラチース氏ノ傳

第七回

ソクラチース氏ノ哲學

第八回

ソクラチース氏ノ學徒

メガラ學派

校印

シリオン學派

犬儒學派

第八回

第二版

卷之二

西洋哲學講義卷之二

西洋哲學講義卷之二

井上哲次郎 講述

第六回

第二期

ソクラチース氏ノ傳

第二十八節 ソクラチース氏ハ前回ニモ云ヘ

ル如ク、詭辯家ノ間ニ崛起シテ、感奮激勵、遂ニ當

時ノ學風ヲ一變ス、實ニ不世出ノ豪傑ト稱スベ

キ人ナリ、氏ハ紀元前四百六十九年ヲ以テアゼ

ンスニ生ル、父ハソフロニスコスト云ヘル雕刻

人ニシテ、母ハフエナレトト云ヘル産婆ナリ、
父頗ル貧ナリト雖モ、子ノ普通教育ニ至リテハ
怠ルコトナク、自己ノ技藝ヲモ兼子教ヘタリシガ、
氏ハ雕刻ノ技ニ於テモ稍、進歩セシト見エ、氏ガ
雕刻セルモノ數百年ノ後マデ存セシト云フ、其
他氏ノ幼年ノ時ノコトハ詳ナラズ、或ハ氏ハアナ
キサゴラス氏ノ徒弟ナリト云ビ、或ハアルケラ
ウス氏ノ徒弟ナリト云ヘド、是等ノ説ハ妄誕
無稽、信ズルニ足ラザルナリ、蓋シソクラチース
氏ハ創意獨得ノ見ヲ以テ古來ノ哲學ヲ一變セ

ルモノニテ、毫モ他人ノ説ヲ沿襲セルモノニア
ラス、モトラス氏曰ク、ソクラチース氏ハ宇宙ノ
存在スル所以ヲ解釋スルコトヲ求メズシテ、自ラ
如何ナル路ヲ經過スベキカヲ知ラシコトヲ求メ
タリト、善哉言ヤ、ソクラチース氏ハ第一期ノ哲
學者ノ如ク、單ニ宇宙ノ解釋ヲ試ミルモノニア
ラズ、專ラ真理ヲ求メソレニ由リテ人ノ當ニ行
クベキ路ヲ知ラントスルモノナリ、
却説氏ガ哲學ヲ教授スルコトニ從事セシハ、蓋シ
中年以後ノコトニテ、ソレヨリ前ニ一二ノ記スベ

キコアリ、氏ザンチツベト云ヘル妻ヲ娶リ、三人ノ
子ヲ得、然ルニザンチツベハ性狂妄ニシテ温順ナ
ラザレ、氏少シモ之ヲ意トセズシテ曰ク、騎馬
ニ練熟セント欲セバ、最モ慥悍ナル馬ヲ撰ブマ
シ、若シ是ヲコレ善ク馭スルヲ得バ、何ノ馬カ馭
スベカラザラン、今我レ衆ト談論シ、以テ一生ヲ
送ラント欲スルガ故ニ、此ノ女ヲ娶リシナリ、若
シ此ノ女ノ所爲ニ耐フルヲ得バ、如何ナル人ノ
所爲ニモ耐スベキヲ知ルナリト、實ニザンチツベ
ノ狂妄ナリシコトハ、後世誰レモ知ラザルモノナ

キホド名高クナレリ、
又氏ハ教授ニ從事セザル前ニ、三夕ビ戰場ニ出
テシガ、第一ノ戰ニハ褒賞ヲ得シカド、功ヲアル
シビヤデイースト云ヘル人ニ讓リテ受ケザリキ
トナリ、又氏ノ陣中ニアリシキニハ、或ハ嚴寒ヲ
モ厭ハズ、薄衣ヲ披テ、赤脚ニテ氷雪ヲ踏テ歩行
シ、或ハ陣前ニ立テ何カ深ク冥想シ、二十四時間
ヲ經、翌朝ニ至リテ始メテ出日ヲ拜シテ去リ、或
ハ陣中糧食乏ウシテ衆皆勞動ニ耐フル能ハザ
ルニ際シ、獨リ氏ノミ能ク勞動ニ耐ヘテ、少シモ

懈怠ノ色ヲ生ゼズ、然ルニ若シ陣中糧食多キハ、
ハ、亦獨リ氏ノミ欣然トシテ之ヲ喜ブノ狀アリ、
而シテ他人ノ氏ニ酒ヲ勸ムルコトアルハ、假令
ヒ多ク之ヲ飲ムヲ欲セザルモ、亦敢テ辭退スル
コトナク、幾杯トナク傾クルコトアレハ、毫モ酩酊ノ
狀ヲ現ハサズ、杯種々ノ奇行アリキト云フ、
又氏ガ交際上ニ於テ如何ナルコトヲナセシカラ
察スルニ、氏ノ教ハ（氏ヨリ以前ノ哲學者トカハ
リ）倫理ヲ以テ之ガ要領トナシ、人間ニ行ハル、
萬法中ノ最大至要ナルモノハ道德ニ外ナラズ。

トス、而シテ世人ヲシテ偏ニ正義（ジユスチー）ス
ヲ遵守シ須臾モツレヲ離レザランコトヲ務メシ
メ、凡ソ真誠ノ幸福ハ、正義ヲ遵守スルニ因テ得
ベキモノナレバ、必ズヤ之ヲ離ルベカラズ、若シ
之ヲ離ル、片ハ、必ズ不幸ヲ來タスニ至ルナリ
トス、氏ハ此ノ如ク正義ヲ遵守スルヲ以テ最モ
切要ノ事トシ、身親ラ之ヲ實行セリ、故ニ氏ノ正
義ヲ爭フニ至リテハ、啻ニ死ヲ畏レザルノミナ
ラス、一世ノ輿論ナリト雖モ、亦敢テ服従スル所
ニアラス、是ヲ以テ當時虐政ヲ行フ者三十人ア

リテ、氏ヲソロスニ喚ビ出ダシテ、レオント云へル人ヲサラミスヨリアゼンスニ伴ヒ來ルベシト命ジタルニ、氏ハ斷然之ヲ拒絕セリ、又氏ノ「世子トル」ノ職ニアリシハ、人民暴動シテ氏ニ迫マリシコアリシニ、氏ハ泰然トシテ動カザリキト云フ、

第二十九節　ツクラチース氏ノ雕刻ノ業ヲ廢シ、始メテ教授ニ從事セシハ、何歳ノ頃ヨリナルカ得テ詳ニシ難シト雖モ、大抵中年以後ノ事ト思ハル、ナリ、氏ノ教授トハ、今日ノ人ノ如ク學

校探ニ於テ堂々ト教授セシニハアラス、朝早ク起キテ市街ニ出テ、或ハ体操場ニ入り、或ハ工作場ニ入り、群衆ノ前ニ於テ容易ニ談論シ、老少男女ノ別ナク、苟モ問ヲ發スル者アレバ、輒チ之ト論難セリ、然ルニ氏ノ鼻ハ廣平ニシテ其孔ハ上向キ、眼球ハ突出シテ脣ハ厚ク、体軀ハ短矮ニシテ下腹ハ彭亨タリ、是レ固ヨリ尋常ノ容貌ニアラス、加フルニ希有ナル性質ト奇異ナル辨論トヲ以テスルカ故ニ、衆皆氏ヲ識リ、氏ノ來ルニ逢ヘバ、相共ニ環立シテ、氏ノ言ヲ所ヲ聽キ、其隱然

褒貶スル所ノ雄辯ヲ以テ痛快ナリトセザル者
ハナカリキ、
當時ニアリテハ、ソクラチーヌ氏ハイツモ驢馬、
錢工、靴工、革工、採ノトバカリヲ言フトテ氏ヲ嘗
ル者モアリシカド、其實、氏ハ常ニ生命ノ事並ニ
生命ノ目途如何ニ就キテ教ヘントヲ務メタリ、
但、近ク譬ヲ取リテ之ヲ論ズルヲ以テ、恰モ日常
凡俗ノ事ヲ説クガ如クニ聞エシナランナレド、
其教フル所ノ旨意ハ、決シテ此ニ止マラザリシ
ナリ、故ニアルシビヤテーヌ氏ノ如キハ、大ニソ

クラチーヌ氏ヲ信ジ、ソクラチーヌ氏ノ命令ス
ル所ハ、神ノ音聲ト同ジク順ハザルベカラスト
マデ言ヘリ、然レドソクラチーヌ氏ハ亦總テ世
ノ智者ヲ以テ自ラ居ル者殊ニ詭辨家ニ對シテ
ハ、實ニ恐ロシキ反對者ノ地位ヲ占メ、常ニ自ラ
余ハ何事モ知ル者ニアラズト言ヘリ、若シ人ア
リ自ラ智者ナリト言フ者アル片ハ、氏必ズ其人
ニ就テ詰問シ、次第ニ論難シ、遂ニ其人ヲシテ、其
言フ所ノ何事ナルヤヲ知ル能ハザラシムルニ
至ル、是レ氏ノ得意ノ論法ニシテ、能ク環立シテ

西法抄卷之二十一
聽ク所ノ垂髻戴白ヲシテ哄然トシテ笑ハシタル所以ナリ、上來陳述セルガ如ク、ソクラチース氏ハ市街ニ於テ談論スルヲ以テ常トシ、田野ノ間ニ至ルハ極メテ稀レニテ、余ハ汲々トシテ學ブ者ナリ、然レモ郊原及ビ樹木ニ由テ學ビ得ベキト少シモ之ナキヲ以テ、唯、市街ノ人民ニ由テ學ビ得ントヲ求ムルモノナリト云ヒテ、イツモ市街群衆ノ中ニ行キ、誰レニテモ問ヲ發スル者アレバ、輒チ之ト論談シ、報酬杯ハ少シモ要求セザリキ、故

ニソクラチース氏ハ唯、談話セシノミ、講義セシニハアラス、唯、辨論セシノミ、書ヲ著ハセシニハアラス、唯、市街ニ多クノ聽衆ヲ得シノミ、學校ヲ設ケ徒弟ヲ集メシニアラザルナリ、然レモ氏ハ能ク人ヲシテ自ラ其不學無識ナルヲ覺知セシメ、且ツソレヲシテ、道德上ノ反省力ヲ生ゼシムベキノ肯綮ヲ默識シ、如何ナル誹謗ニ逢フモ、如何ナル憎惡ヲ來タスモ、毫モ之ヲ意トセス、百折不撓ノ心ヲ以テ自己ノ思フ通りニ為サントヲ務メタルガ故ニ、氏ノ名ハ數千歳ノ後マデ喧傳

スルニ至レリ、

第三十節

ソクラチーヌ氏ハ前節ニモ言ヘル如ク、ミニクキ容貌ノ人ナリシカド、何トナク、秀テタル色アリテ、尋常ノ人ト異ナレリ、又ゼノ乃ニ氏ノ言ニ據レバ、ソクラチーヌ氏ハ神ニ對シテハ信心深ク、一言一行モ神意ニ逆ハザランヲ務メ、人ニ對シテハ固ク正義ヲ守リ、寸毫モ過失ヲセザランヲ務メ、小心翼々トシテ克己修徳ニ志シ、絶エテ快樂ノ為ニ善ニ違ヒシコナク、且ツ智慮深キガ故ニ、正邪ヲ決スルノ場合ニ臨

ズ、曾テ錯誤セシコアラザリキ、實ニ氏ハ世界ニ譽ルトアラユル人類中ニ最善最好ナル者ナリト、是レ決シテ虚褒濫賞ニアラズ、然レ氏ハハ方敵ヲ受ケテ、是レ氏ハ誰レ彼レヲ別ナク、苟モ真理ニ戾ルコアレバ、乃チ之ヲ擊破スルニ出テ、夕何トナリ、故ニ今日ヨリ之ヲ言ヘバ、氏ハ聖人トモ稱スベキ人ナリ、當時テアリテハ他人ノ心ヲ傷ス様ナルコトモ、カセシテ明ナリ、然レ氏若シ今日ノ人ガ氏ヲ欽慕スル様ナル心ヲ、當時ノ人ガ有セシカラバ、實ニ氏モ蓄害ニ逢フコトハ、力

リシナランナレバ、當時ニアリテ然レ氏ノ如何ナ
ル人物ナルカヲ知ル者ハ殆ド稀ナリキ、リユウ
ス氏ノ曰ク、豪傑ノ士ハ、時人ノ能ク知ル所ニア
ラズ、唯、ソレト同等ノ人物ノ能ク之ヲ知ルト
雖モ、同等ノ人物ハ極メテ稀ナルモノナリ、然レ
氏次第ニ世ヲ經ルニ隨テ、往々豪傑ノ士ノ出ヅ
ルアリテ前代ノ豪傑ノ士ヲ稱揚シ、世上ノ論始
メテ定マラル、然レ氏豪傑ノ士ハ大ニ為ス所アル
者ナレバ、必ズヤ舊弊ヲ革除シ、陋習ヲ矯正シ、爲
メニ他人ノ心ヲ傷ラトアルヲ免レザルナリ、ソ

クラチース氏モ亦此ノ如クナリキ、是レ其蓄害
ヲ招キレ所以ナル歟ト、亦痛快ノ論ナリト言ハ
ザルヲ得ズ、

第三十一節 クラチース氏ハ久シクアゼン

スニ住居セシガ、其間種々ノ變遷モアリテ、七十
歳ノ老年ニ及ビタリシ中、法庭ニ喚ビ出ダサレ
テ裁判ヲ受クルコトハナレリ、ソハ何事ノ爲メ
ニ法庭ニ喚ビ出ダサレタルカト問フニ、メリト
スト云ヘル少年ノ詩人、及ビエニタスト云ヘル
政黨ノ巨魁、并ニライコント云ヘル演說家ノ三

名(何レモ才簡ノ輩)カ原告トナリテツクラチー
ス氏ハ古來希臘人ノ信ズル所ノ神ヲ信セズシ
テ市ニ年少ヲシテ異ナリタル神ヲ信ゼシムト
申立テタルヨリ起リタルコナリキト云フ、然レ
氏氏ガ此ノ蓄害ヲ來タシタルハ、半ハ氏ガ世人
ノ不正邪惡ナルヲ憤リ、攻撃辨論以テ已マサル
ニ起因シ、半ハ氏ガ政治學ハ最モ困難ナル學問
ナリ、政治ヲ以テ操舟ニ比スレバ、其困難ナルコ
限リナキ程ナリ、然ルニ世人或ハ未熟ノ舟子ヲ
信ゼズシテ、却テ未熟ノ執政者ヲ信ジ、甚シキハ

自ラ執政者トナラント欲スル者アリ、杯ト云ヒ
タルニ起因スルコト思ハル、ナリ、却説氏ハ法
庭ニ出テ、安靜嚴肅ニシテ、稍、高慢セルガ如ク見
エタリ、是レ蓋シ其真理ノ爲メニ已ヲ屈セザル
ニヨリテ然ク見エタルナラニ、氏ハ三十日間牢
中ニアルコトヲ免サレタレ、遂ニ政府ヨリ毒ヲ
遺テ自殺セシメタリ、實ニ是レ紀元前三百九十
九年ノコトナリ、

ソクラチー、ス氏ガ刑罰ノ宣告ヲ受ケシ、アゼ
シ、ス人ニ對シテ、臨終ノ演説ヲナセリ、其文載セ

テアレトト氏ガ會話篇卷一(アポロチー)ニアリ、
蓋シプレートト氏自ラソクラチース氏ガ宣告ヲ
受ル所ニ到リテ、親ク其演說ヲ聽キ、後之ヲ書ニ
筆セシ者ナリ、今其文ヲ讀ムニ、悲壯慷慨、人ヲシ
テ涙ヲ揮ハシム、其文ノ終リノ句ニ云ク、嗟是レ
吾輩離別ノ時ナリ、我レハ死シ、汝ハ活ク、然レモ
孰レカ善、孰レカ惡カハ、神ヲ除クノ外ハ、誰レモ
知ル能ハザルナリト、亦以テ氏ノ心ヲ察知スベ
キナリ、
又ソクラチース氏ノ毒ヲ飲テ死セシキノ状モ、

プレートト氏ノ會話篇卷一(ソトド)ニ詳ナリ、今其
文ヲ抄譯セシニ、ソトド氏曰ク、余ハ友人ノ死セ
ルヲスル片ニハ、哀情ヲ生ゼザルコトナシト雖モ、
少シク悲チリス、氏ノ死セントスルニ當テハ、サホ
ト哀情ヲ生ゼザリキ、而シテ氏ハ愉快ナル状貌
アルガ如クニ見エタリ、時ニ余ハ竊ニ氏ハ此世
界ヲ辭スルト雖モ、神必ズ氏ヲ保護シ、人間ノ幸
福ニ勝ル幸福ヲ受クルナルベシト思ヘリ、コレ
ヨリソクラチース氏ハ精神不滅ノ論ヲナシ畢
リテ、他室ニ入り沐浴セシトス、クリト氏モ亦ソ

口ニ行カントシタレ、氏吾徒ニ暫ク待テト言
ヒタルニ因テ、吾徒ハ氏ノ來ルヲ俟テ、共ニ氏ノ
事ニ就テ色々噂ヲナシ、且ツ以爲ク、吾徒ハ今ヨ
リ阿爺ヲ失ヒタル孤ト同シク、餘生ヲ送ラザル
ヲ得ズト、ソクラチース氏ガ沐浴シ終ハル比ニ、
氏ノ子（一人ハ稍、生長シタレ、其他ノ一人ハ尚
ホ幼稚ナリ）及ビ氏ノ家族ニ屬スル婦人來リテ
氏ニ逢ヒシカド、氏唯之ニ肝要ナルコトノミヲ告
ゲテ、家ニ歸ラシメ、再ビ吾徒ノ所ニ來レリ、氏沐
浴ニ時ヲ移セシカ爲メ、此ノ時、日モ已ニ沈マン

トセリ、氏ガ沐浴シテヨリ後ハ、復タ多言セザリ
キ、何故ナレバ、此ノ時、官司ノ僕來リテ曰ク、ソク
ラチース氏ニ於テハ、他人ニ於テ見ル如キ狀貌
ヲ見ズ、ソハ他事ニアラズ、官司ノ命ヲ奉ジテ人
ニ毒ヲ飲ムベシト告グルキハ、其人怒リテ余ヲ
惡ムト雖モ、ソクラチース氏ハ之ト大ニ異ニシ
テ、最モ温和寛大ナリト、乃チ淚ヲ垂レテ去リシ
ガ、間モナク一人毒ヲ調合セル一箇ノ盃ヲ携ヘ
來レリ、ソクラチース氏之ヲ見テ、ソレハ如何様
ニスレバ可ナリヤト問ヒシニ、其人答ヘテ曰ク、

何モ別ニナスベキナケレモ、唯之ヲ飲ミタル
ノ後、逍遙スベシ、若シ兩脚稍重キヲ覺エバ、直ニ
安卧スベキナリト、乃チ盃ヲソクラチトス、氏ニ
與フ、ソクラチトス、氏欣然トシテ之ヲ受ケ、少シ
モ戰慄スルトナク、又顔色ヲ變ズルコトナク、唯、平
生ノ如ク牡牛様ノ狀貌ヲ認メタルノミ、ソクラ
チトス、氏其人ニ謂テ曰ク、此ノ盃中ノ物ヲ少シ
ク神ニ捧グルコトハ、法律ニ違フヤ否ヤト、其人答ヘ
テ曰ク、是レ原ト丁度ヨキ様ニ加減シタルナリ
ト、氏曰ク、我レ其意ヲ了解セリ、然レモ今此ノ世

界ヲ去ラントスルニ當テ先以之ヲ神ニ捧グル
モ、何ノ不可ナルコトカ、是レアラント、談話ヲ畢リ
テ、其盃ヲ舉ゲ、欣然トシテ速ニ飲ミ盡セリ、是迄
ハ吾徒モ甚シク泣啼スルニ至ラザリシカド、事
此ニ及テ、最早耐フルコト能ハズシテ、落淚袖ヲ濕レ
テ已マザレバ、遂ニ外套ヲ以テ身ヲ蔽ヒ、自己ノ
不幸ヲ嘆嗟セリ、余ハ實ニソクラチトス、氏ノ爲
メニ泣啼スルニアラズシテ、此人ノ如キ善良ノ友
人ヲ失フコトカト思ヒテ、惜歎ニ耐ヘザリキ、クリ
ト氏ノ如キハ落淚ヲ禁ズル能ハズシテ起立シ、

アホロドロス氏ハ亦泣キ叫ブ_テ甚シク、爲メニ
他人ヲレテ益、悲哀ノ情ヲ起サシメレカバ、ソク
ラチ_トス氏之ヲ見テ、呼デ曰ク、公等ハ何ヲスル
ヤ、余ガ先刻婦人等ヲ歸セシモ、全ク此ノ如キ邪
魔ヲナサン_トヲ恐レテナリ、嘗テ聞ク、人ハ當ニ
穩靜ニ死スベシ_ト、公等靜謐ニシテ耐フル所ア
レト、吾徒之ヲ聞テ慙愧シ、強テ落涙ヲ禁ゼリ、然
レモソク_ラチ_トス氏ハ最早兩脚稍重キヲ覺エ、
吾徒ニモ之ヲ告ケ、直ニ安卧セリ、此ノ時、氏ニ毒
ヲ與ヘシ人來リテ、氏ノ兩足兩脚ヲ見、既ニシテ

氏ノ兩足ヲ強ク壓搾シ、能ク感ズルヤ否ヤト問
フニ、氏答ヘテ曰ク、感セズト、又兩股ヲ壓搾スル
ニ亦感ゼズシテ、漸ク冷ナルニ至レリ、ソク_ラチ
_トス氏自ラ其身ニ觸レテ曰ク、毒既ニ胸ニ達セ
リ、我レ將ニ去ラントスト、小腹已ニ冷ナルニ及
デ、被覆ヲ除キ、此ノ時、氏ハ被覆ヲ以テ身ヲ蔽ヒ
シガ故ニ我レイスキユラピオス氏ニ一足ノ鶏ノ
負債アリ、我が爲メニ之ヲ償却セヨト云ヒテ逝
去セリ、是レ余ガ友人ノ終リニテ、彼レハ帝ニ余
ガ交朋中ノ最モ善良ナルモノナルノミナラズ、

又最モ智慧多ク最モ正直ナルモノナリキト、余
此ノ文ヲ讀ム毎ニ、未ダ曾テ淚ヲ灑カズバアラ
ザルナリ、

第七回

ソクラチース氏ノ哲學

第三十二節 ソクラチース氏ヨリ以前ノ哲學
者ハ、皆宇宙ノ成立、即チ萬物ノ縁テ起ル本源ヲ
窮ムルヲ務メ、天文學、宇宙開闢論（コスモゴニ
一）幾何學、形而上學、并ニ物理學等ヲ混合シテ、漫
然タル思辨ヲナセシガ、ソクラチース氏ニ至テ、

始メテ此ノ錯雜セル哲學中ヨリ倫理學ヲ分離
シ、啻ニ之ヲ以テ一種ノ學トセシメ、ミナラズ、又
人ノ當ニ學ブベキノ學實ニ此ニ外ナラザルナ
リトセリ、抑古來ノ哲學者ガ百方力ヲ盡シテ宇
宙ノ幽微ヲ闡カントテ試ミタレバ、遂ニ其效ヲ
奏セザリシハ、天神之ガ秘奧ヲ洩スヲ欲セザル
ニ起因スルナルベシト思惟シ、宋儒杯ノ道德ノ
ミヲ以テ學問トスルト同シク、人ハ唯、人事ヲ研
究シ、天事ハ天ニ任スベシトセリ、是レ其郊原及
ビ樹木ニ由テ學ビ得ベキト少シモ之ナシト云

ヒタル所以ニシテ、全ク古代ノ哲學者ニ對シテ反
動ヲ起セシ者ト知ルベシ、

ソクラチース氏ハ又當時ノ詭辯家ニ對シテモ
反對ノ地位ヲ取レリ、蓋シ氏ハ辨證式ヲ用ヒ、詭
辯家ハ修辭學ニ據レリ、夫レ修辭家ハ唯、他人ヲ
說諭シテ己レガ信ズル所ヲ信ゼシムルニ過ギ
ザレズ、辨證家ハ之ト大ニ同ジカラズシテ、專ラ論
辨ニ賴リ、古來人ノ信ズル所ト雖モ、其果シテ眞
ナルヤ否ヤヲ檢視シ、イハユル單元(アクシオム)
ノ類ト雖モ、亦必ズシモ信ゼズ、而シテ凡ソ人智

及ズ限リハ、如何ナル反對論モ、之ニ當リ之ニ
答ヘザルヲ得サルナリ、詭辯家ハ人ハ純正ノ眞
理ニ達スル能ハサル者ナリト思惟シ、唯、古ヨリ
アリ來リノ說ヲ以テ満足セリ、然ルニソクラチ
ース氏ハ人ハ未ダ眞理ニ達セザルナリト思惟
シ、乃チ詭辯家ヲ排抵シ、以テ眞理ヲ明ニセシ
ヲ企テタリ、然レズ氏以爲ク、詭辯家ヲ排抵セシ
爲メニハ、其室ニ入リテ其戈ヲ執ルニ若カズト、
乃チ詭辯家ト同様ノ情態ヲナシ、彼ノ主義ニ據
テ彼ヲ攻撃スルノ路ヲ開キシガ故ニ、其言ヲ所

往々詭辨家ニ類ス、就中誰レモ故意ニ惡ヲナス
ニアラズ、故意ニ惡ヲナスモノハ自ラ其惡ヲナ
スヲ知ラザルニ優レリト云フカ如キハ、詭辨家
ノ言ト殆ド辨別シ難キナリ、故ニ當時ニアリテ
モ、或ハ氏ヲ以テ詭辨家ト同一視セシ者モアリ
キ、然レモ氏ノ哲學ト詭辨家ノ哲學トヲ比較シ
見ルニ、大ニ逕庭スル所アリ、何ゾヤ、詭辨家ハ主
觀的ノ思辨ニ由テ一切客觀上ノ標準ヲ否定ス
ルヲ以テ其勢トスレモ、氏ハ一人ノ心ハ則チ千
萬人ノ心ニシテ我レノ標準トスル所ハ人亦之

ヲ標準トセザルヲ得ズト思惟シ詭辨家ノ如ク
道德上ノ事マデモ皆一定ノ說ナク、唯、人々ノ說
ノミナリトセズシテ、道德上ニ於テハ、衆人ノ當
ニ一致セザルベカラザルモノアリト論ジ、各自
ノ異見以外ニ於テ一定普通ノ道德ヲ起サン
ヲ企テタリ、

第三十三節 ソクラチーヌ氏ハ思想上ノ革命
ヲナシタル人ニテ、或ハ氏ヲ以テ眞誠ナル希臘
哲學ノ創稱者トナス者モアルヨシナルガ、抑、氏
ガ此ノ如キ大事業ヲ成就セシハ、職トシテ其方

法ノ宜シキヲ得タルニ由ルナルベシ、アリスト
トトル氏曰ク正シクソクラチース氏ノ發明ナ
リト稱スベキモノニアリ、曰ク、歸納推理(インダ
クチーヴ、リーゾニク)曰ク、抽象定義(アブスト
ラクト、デスニシヨント)、此ニ由テ之ヲ觀レバ、ソ
クラチース氏始メテ定義ヲ用ヒ、歸納法ニ由テ
推理セシナリ、是レ今日ノ人ニアリテハ奇トス
ルニ足ラザルコトナレド、當時ニアリテハ、誰レモ
定義ノ必要ナルコト、歸納法ノ確實ナルコトヲ
知ラザルニソクラチース氏獨リ之ヲ知り、此ニ

由テ世人ノ蒙昧ナル心ヲ啓發シ、以テ科學的ノ
概念(サイエシチヰツク、ノトシヨンス)ヲ生ゼシ
ムルコトヲ務メタリ、蓋シ人ノ用フル所ノ言語ハ
旨意ナキニアラズト雖モ、其旨意ニ就テ各自異
見ヲ抱ク例ハ、兇惡ハ罰スベシト云フコトハ、衆
ノ一致スル所ナレド、何ヲカ兇惡トスコト云フニ
至テハ、衆必ズ一致スル能ハズ、是レ定義ノ必要
ナル所以ニシテ、ソクラチース氏ノ定義ヲ以テ
基址トナシ、ソレニ由テ歸納推理ヲナセシモ、此
ニ外ナラザルナリ、

ソクラテース氏ノ用ヒタル方法ニハ、正面反面
ノ兩面アリト謂フベシ、反面ノ方法トハ、即チ其
反言(アイロニ)ヲナスコトニテ、例ヘバ、自ラ智者
ナリト思フモノアルキハ、氏必ズ余ハ不學ナリ
ト云ヒテ、其人ニ就テ教諭ヲ請ヒ、必ズ問フ所ア
リ、其人深ク思慮ヲナサズシテ直ニ之ニ答フル
ニ、氏復タ之ニ問ヒ、次第ニ論難シ、其人ヲシテ遂
ニ其言ヲ所ノ前後矛盾シ、初メ義理ノ明白ナル
ガ如ク見エタルコトモ、其實、決シテ明白ナルニア
ラザルコトヲ覺知セシム、是レ即チソクラテース

氏ノ得意ノ所爲ニテ、之ヲ反面ノ方法ト稱スル
ナリ、若シソクラテース氏が右ノ如キ反面ノ方
法ヲミヲ用ヒシコトナラバ、唯、吾人ハ何事モ知ラ
ザルナリト云フコトヲ證明シ得シノミナレバ、氏
亦又助産(メイト)チツクノ術ト稱スベキ正面
ノ方法ヲ用ヒ、自ラ其母ノコトエナレトト氏(即チ
産婆ニ比セリ、何トナレバ、氏ハ産婆ノ能ク他人
ヲシテ産出セシムルガ如ク、他人ヲシテ未ダ曾
テ有セザル所以觀念ヲ生ゼシムルコトニ於テ尤
モ上手ナリケレバナリ、猶ホ委シク語ヲ換ヘテ

之ヲ言ヘバ、氏ハ他人ニ問ヲ發シ、答フレバ復々
問ヲ發シ、此ノ如クニシテ遂ニ其人ヲシテ新奇
ノ思想ヲ産出セシムルノ術ニ長ゼシガ故ニ、自
ラ其母ニ比セシナリ、然ルニ氏ガ此ノ術ヲ施セ
シハ、主トシテ歸納法ノ力ニ由ルニテ、特殊ノ
事ト特殊ノ事トヲ比較シ、以テ一種ノ統合セル
眞理ヲ發見セン、即チ概念ヲ生ゼン、トヲ務メ
タリ、ト然ルニ又ソクラチース氏ハ概念ヲ生ゼン爲メ
ニハ、定義ヲ用ヒ、以テ特殊ノ性質ヲ離ル、ニ若

カズト思惟シ、乃チ何ヲカ正義トシ、何ヲカ法律
トシ、何ヲカ信心トスル杯ト、總ベテ他人ト辨論
スルニ先チテ名稱ノ定義ヲ得ン、トヲ望メル、ト
孔子ノ「必也正名乎」ト云ヘル意ト異ナラズ、即チ
道德ヲ以テ哲學上ノ問題トシ、其性質ヲ尋究セ
ンガ爲メ、先ツ正義、亮直等ノ如キ名稱ノ定義ヲ
求メ、此ニ由テ其概念ヲ得ン、トヲ望メリ、之ヲ要
スルニ、ソクラチース氏ノ用ヒタル方法ハ歸納
法ニ由テ多クノ格別ナル場合ヨリ普通ノ性質
ヲ查出スルニアリ、

然レモ茲ニ注意スベキ一、三アリ、第一ハツクラ
チーヌ氏ノ定義ハ名稱ノ定義ニシテ、實物ノ定
義ニアラザル一、是レナリ、總シテ古ノ思想家(シ
ンカー)ハ名稱上ノ區別ヲ實物ノ區別ナリト思
ヒ誤リシガ、ソクラチーヌ氏モ矢張名稱ヲ解釋
スルハ實物ヲ解釋スルニ同ジトシ、且ツ名稱ノ
定義中ニ舉グル所ノ性質ハ、實物ニモソレト同
ジク存スルモノトセリ、是レ氏ノ謬見ナリト謂
ハザルヲ得ズ、然レモ當時ニアリテハ、名稱ノ定
義モ大ナル利便ヲ學者ニ與ヘシトト知ルベシ、

第二ハツクラチーヌ氏ノ歸納法ハ、ペーロニ氏
ノ歸納法ト同一ナラザル一、是レナリ、固ヨリ兩
氏ノ歸納法ハ互ニ相類似スト雖モ、亦大ニ異ナ
ル所アリ、何ゾヤ、ソクラチーヌ氏ノ歸納法ハ多
クノ特殊ノ場合ヲ舉グル一、即チ比考推理(リ
グニンク、バイ、アナロヂ)ニ過ギザレモ、ペーロ
ニ氏ハ之ヲ非ナリトシテ用ヒザリキ、是レ其差
ナリ、第三ハツクラチーヌ氏ハ思想上ノ革命ヲ
ナシタレモ、主觀的ノ狀態(ソブゼクチーヴ、アツ
チチエー卜)ハ故ノ如クナリシ一、是レナリ、蓋シ

ツクラチリス氏ハ非難法(エレニコス)ニ由テ反
對論者ヲ攻撃シ、當時ノ人ノ思想上ニ於テ大ナ
ル變化ヲ生ゼシト雖モ、古來ノ學風ヲ全ク客觀
的ニ一變セシト云フニハアラズシテ、却テ氏ハ
氏ヨリ以前ノ哲學者ヨリ主觀的ニ偏向セシト
謂フモ亦不可ナルヲナキナリ、然レモ古來ノ漫
然定リナキノ哲學ハ、氏ニ至テ始メテ其基址ヲ
得タルバ、氏ノ哲學上ニ大功アルハ固ヨリ論ヲ
竣タザルナリ、
第三十四節 ツクラチリス氏ハ孔子ト同ジク

日常ノ事ノミニ注意シ、道德ノ外ハ置テ論セサ
リキ、故ニソクラチリス氏ヲ哲學者ノ中ニ列ス
ベキヤ否ヤヲ疑フ者モアリ、是レアリストト
ル氏ガソクラチリス氏ノ思辨ハ專ハラ道德上
ニ限り、毫モ天地一般ノ事ニ及バズトイヒタル
ニ據ルナルベシト雖モ、然レモソクラチリス氏
ハ始メテ定義ヲ用ヒ、此ニ由テ歸納推理ヲナセ
シナレバ、純粹ナル道德家トハ大ニ異ナル結果
ヲ生ゼリ、故ニ此點ニ於テハ孔子ト同一視スベ
カラザルナリ、然レモ定義モ歸納法モ、本ト皆人

倫交際ノ上ノ實益ヲ圖ラン爲メニ用ヒシナレ
バ、矢張ソクラチース氏ハ專ハラ道德上ニ注意
セシト謂ヒテ不可ナルヲナシ、ベイン氏曰ク、ソ
クラチース氏ノ心ノ傾向ハ、全ク實際上ニアリ
シナレバ、氏ヲ實利家(ユーチリタリヤシ)ト云フ
モ亦可ナリト、蓋シ泛論ニアラザルナリ、
ソクラチース氏以爲久徳ハ即チ智識ナリ、不徳
ハ即チ無智無識ナリ、其意如何ニト云フニ、一言
一行ト雖モ、能ク其目的、方法、並ニ事情ヲ認識シ
テ、ソノ認識セル概念ノ通りニスルキハ之ヲ徳

トシ、然ラザルキハ之ヲ不徳トス、而シテ知覺ナ
キノ行爲ハ、矛盾ヲ來タシ、爲メニ其效ヲ奏セザ
レバ、知覺アルノ行爲ハ、能ク其正鵠ニ達スルヲ
得、之ヲ要スルニ、知覺アリテ爲スヲハ一トシテ
惡シキヲナク、知覺ナクシテ爲スヲハ一トシテ
善キヲナシ、即チ人ヲシテ不徳ナラシムル者ハ、
何ゾヤ、他ナシ、唯、知覺ノ缺損ニヨルノミ、蓋シ人
ノ性タル善ニ就キ惡ヲ避ケントスル者ナリ、故
ニ惡ノ惡タルヲ知リテ之ヲ爲ス者ハナシ、若シ
之ヲ爲ス者アラバ、ソレハ惡ヲ善ト誤リ認メタ

ルナリ、若シ又惡ノ惡タルヲ知リテ惡ヲ爲ス者
アラバ、ツレハ自己ノ意志ニ反スル者ト謂ハザ
ルヲ得ズ、然レモ德ハ智識ナルガ故ニ、惡ノ惡タ
ルヲ知リテ惡ヲ爲ス者ハ、惡ノ惡タルヲ知ラズ
シテ惡ヲ爲ス者ニ優レリト、此ノ如ク論ゼリ、
ソクラチース氏ノ德ハ智識ナリト云ヘル命題
ヨリシテ、二箇ノ命題ヲ抽出スルヲ得ルナリ、其
一ハ總ベテ德ハ一ナリト云フニテ、善惡ヲ區
別スルハ、全ク知覺ニ由ルヲナルニ、知覺ハ如何
ナル場合ニ於テモ同一ナル者ナルガ故ニ、此命

題ヲ得ルナリ、他ノ命題ハ德ハ教フベキナリト
云フニテ、各人トモ學ベバ德ニ達スベシトナ
リ、實ニ以上ノ三命題ハ、ソクラチース氏ノ哲學
ヲ一切包含セリトモ謂フベキ者ニテ、實ニソク
ラチース氏ハ此三命題ヲ以テ倫理學(エシックス)
ノ基址ヲ立テタリ、故ニ氏ヲ以テ道德家ノ元祖
ト稱スルモ亦決シテ不可ナルヲナシ、
ソクラチース氏ハプレート氏ト同ジク道德學
ノ目途(即チ標準)ハ何ナリト云フヲ明言セズ
シテ、唯、漫然人類ニ關スルノ術ト云ヒ、又社會ニ

アリテ如何ニ動作スベキカノ術ト云ヒ、又人間
幸福ノ學ト云ヒタルノミ、然レモ此ニ由テ氏モ
亦幸福自己ノ幸福カ、他人ノ幸福カ、氏ハ明言セ
ザレモヲ以テ人間ノ目途トシタルナルベシト
人ヲシテ推測セシムルナリ、シユウグレル氏曰
ク、ソクテチース氏ハ肉體上ノ嗜欲ヲ離レ、身ヲ
妄念ノ外ニ置キ、天神ノ近クニ進ミ、鑑空衡平ニ
シテ、心意ヲ動カサズ、而シテ精神ヲシテ一點ノ
不淨ヲ蒙ラザラシムルヲ以テ、最大ノ幸福トシ、
道德及ビ福祉ノ兩概念ヲ同一ニセシナルベシ

ト、果シテ然ラバ、ソクテチース氏ノ道德上ノ説
ハ、固ヨリ不充分ナリト雖モ、亦今日ノ實利學派
ノ説ト、畧其旨意ヲ同ウスル所アリト謂フベキ
ナリ、

第三十五節 ソクテチース氏ノ政治上ノ論ハ、
智者ニ權威ヲ與フベシト云フニ止マル、即チ智
識アル者ニアラザレバ、能ク天下ヲ支配スルコ
能ハズトノ意ニテ、氏又善良ナル管理者ハ牧羊
者ノ如クナラザルベカラズト云ヘリ、氏ノ政治
上ノ論ハ、右ニ述ブル所ニ過ギズト雖モ、之ヲ實

際ニ應用スレバ、大ニ益アルコトナリ、夫レ經濟ナ
リ、法理ナリ、政理ナリ、教育ナリ、其他總ベテ管理
者ノ通曉セザルベカラザル所ノ學ハ、専門ノ士
ト雖モ、未ダ其蘊奧ヲ究ムルコト能ハズシテ、今日
確信スルコトモ、明日ニ至テ、甚シキ謬誤ナルコトヲ
發見スルコト、往々コレアリ、故ニ若シ無學ナル人
ヲシテ政治ヲ施サシメバ、如何ナル蓄害ヲ人民
ノ上ニ來タスヤモ知ルベカラザルコト、彰々乎ト
シテ疑フベカラザルノ理ナレバ、ソクラチー
ス氏ノ言ノ確當ナルヲ知ルベキナリ、蓋シ士ノ

第三十六節 ソクラチー
ス氏ハ當時ノ人ガ信
ゼシ如ク、多クノ神ヲ信
ゼザルニハアラスト雖
モ、亦分明ニ唯一神ヲ
信ジ、他ノ一切ノ神ハ、
コト唯一神ニ屬從セル
モノトセリ、チェレル
氏ノ説ニ據レバ、ソク
ラチース氏ガ此ノ如ク
神ヲ信ゼシハ、夫ノヘ
ラクリトス并ニアナキ
サゴラスノ兩氏ガ一種
ノ存靈ヲ信ゼシト異ナ
ラズ、即チ氏ハ神ハ世界
ヲ管理スルノ道理(リー
ゾン)ニシテ、ソノ世界
ニ於ケル、猶ホ精神ノ身
體ニ於ケルガゴトシト
思惟シ、隨テ又神ハ見ル
ベカラザルモノ

西洋打學詩集 卷之二
ニテ、全智全能ナリ、而シテ又遍在セルモノナリトシ、且ツ精神ハ見ルベカラザレド、其身體ヲ動かスノ跡ニ至テハ、顯然蔽フベカラザレバ、神ノ世界ニ於ケルモ亦然ルナルベク、又精神ハ世界ノ一部分、即チ身體上ニ於テ無限ノ權力ヲ有スルモノナレバ、神ノ世界ニ於ケルモ亦然ルナルベク、又精神ハ身體ノ中一處トシテ達セザルナケレバ、神ノ世界ニ於ケルモ亦此ノ如クナルベシトセリ、
ソクラチーヌ氏ハ精神不滅ノトヲ信ジ、其毒ヲ

飲テ死セントスル前ニ友人ト此事ヲ論ゼリ、蓋シ精神不滅ノ論ハ、ピサゴラス氏ニ始マルト雖モ、科學ノ法ニ由テ之ヲ論スルハ、ソクラチーヌ氏ニ始マルト云フ、
第三十七節 茲ニ又氏ニ就イテ奇異ナル說話アリ、ソハ何事ナルカト云フニ、氏ハ幼少ノ時ヨリ一ノ天鬼(テイモン)アリテ、己ガ身ヲ護シ、若シ危難ノ場合ニ遭遇スルキハ、忽チ耳邊ニ呬ギテ己レヲ戒ムト信ジ、凡ソ進退ヲ決スルニ當テハ、天鬼ノ聲ヲ俟チシト云フ、是レナリ、オリムビ

オドロス氏以爲ク、天鬼トハ眞誠ノ天鬼ニアラ
ズシテ、良心ヲ然ク譬ヘテ言ヒタルナラント、近
世ノ學者中ニモ、天鬼トハ譬諭ニ過ギズト云フ
者、往々コレアリ、然レモ、氏リユウキス氏以爲ク、是レ
決シテ譬諭ニアラザルベシ、ソクラチース氏ミ
ツカラハ固ヨリノ、其他當時ニアリテ氏ヲ誣
陷シタル者モ、氏ヲ辨護シタル者モ、皆人類以外
ニ存在スル一種高等ノ神靈アリテ氏ヲ警戒ス
トシ、氏ノ心ノ迷トハセザリキ、且ツ氏ハ唯、天鬼
ト云ヒテ、如何ナル天鬼ト云ハズ、又天鬼ノ聲ハ、

常ニ聞クヲ得ズシテ、唯、時アリテ聞クヲ得シ
ナレバ、是レイハユル幻想(ハルシネーシヨン)ノ
然ラシメシ所ナラント思ハル、ナリ、即チマホ
メットルトサトパスカール諸氏ト同ジク感激シ
易キ脳髓ヲ有シ、時アリテ幻想ヲ來タセシナリ、
ソレヲ氏ハ幻想トハ知ラズシテ、天鬼ノ聲ト思
ヒシナルベシト、余未ダリユウキス氏ノ説ノ果シ
テ是ナルヤ否ヤヲ知ラザルナリ、

第八回

ソクラチース氏ノ學徒

第三十八節 ソクラチーヌ氏ガ死シタル後、其
學徒各、其學ビ得タル所ヲ以テ、各處ニ散在シ、互
ニ相容レザル所アリキ、是レ如何ナルトニ起因
セシカト問フニ、蓋シソクラチーヌ氏學徒ハ氏
ノ教并ニ氏ノ言行ニ由テ、人ハ當ニ普通ニシテ
且ツ純全ナル眞誠ノ目途ニ達スルトヲ務メザ
ルベカラザルトヲ知り得タリト雖モ、此ノ如キ
目途ハ何ナリト云フトヲ、ソクラチーヌ氏ガ明
言セザリシヲ以テ、此點ニ就テ三派ノ學派ヲ生
ジタリ、曰ク、メガラ學派、曰ク、シリシ學派、曰ク、犬

儒學派、是レナリ、蓋シ此三學派ハ皆同ジクソク
ラチーヌ氏ヲ祖述スト雖モ、各、其教ヲ異ニシ、一
偏ニ局スルノ傾向ヲ生ズルニ至レリ、即チメガ
ラ學派ハ智識ヲ主トシ、シリシ學派ハ快樂ヲ主
トシ、犬儒學派ハ嚴肅ヲ主トシ、ソクラチーヌ氏
ニ於テハ合一セル者ヲ三派三様ニ分受スルト
トナレリ、シセロ氏曰ク、ソクラチーヌ氏ノ談話
ヨリシテ後ノ哲學者ガ甚ダ相異ナリタル結果
ヲ抽出シ、氏ニ於テハ合一セルトヲ各、分受シ、互
ニ相容レザル所ノ學派ヲ起セリト、即チ此事ヲ

言フナリ、然レモ是レ獨リ學徒ノ罪ニアラズシ
テ、ソクヲチース氏ノ哲學ノ未ダ十全ナラザル
ノ致ス所ト謂ハサルヲ得サルナリ、
メガラ學派

第三十九節　メガラ學派ノ首唱ハユークリッド
氏ナリ、有名ナル數學家ノユークリッド氏ト相混
ズベカラズ、氏ハ紀元前四百五十年ヨリ四百四
十年ノ間ニメガラト云ヘル處ニ生レシ人ニテ、
幼少ノ時ヨリ哲學ヲ好ムヲ甚シク、殊ニパルメ
ニデース氏及ビ其他エリア學派ノ書ヲ研究シ、

頗ルゼノ氏ノ辨證式ニ熟達セリ、實ニユークリッ
ド氏ノ最モ長ゼルモノハ即チ辨證式ニシテ、ソ
クヲチース氏ニ接シタルノ後モ、失張辨證式ヲ
用フルヲ甚シカリシカバ、是レ詭辨ナリト、ソク
ヲチース氏ニ警ラレタリト云フ、
ユークリッド氏ハソクヲチース氏ノ談話ヲ聽ク
トヲ大ニ喜ビ、甚シキニ至テハソレガ爲メ自身
ノ危難ヲモ顧ミザリシト杯モアリ、一時アゼン
ストメガラトノ間ニ葛藤ヲ生シ、メガラ人ニシ
テアゼンストニアルモノハ、死罪ニ處セララル、ト

トナリシカド、氏ハ之ヲモ恐レズ、婦人ノ姿ニ装
ヒ、夜ニ乗ジテアゼンスニ來リ、ソクラチース氏
ノ談話ヲ聽キ、歸リテ其聽キタルトニ就テ沉思
冥想セリ、蓋シメガラヨリアゼンスニ至ルマデ
二十英里ノ道程ナルニ、之ヲ意トセズシテ通行
スルハ、志ノ厚キニアラザルヨリハ、決シテナス
能ハザル所ナリ、而ルヲ況ンヤ一タビ發覺スレ
バ死罪ニ處セラル、ニ於テヲヤ、
ブルケル氏以爲ク、ユークリッド氏ガアマリ議
論ヲ好ムヲ以テ、ソクラチース氏之ヲ非難シ、爲

メニ二氏ノ間ニ不和ヲ生ズルニ至レリト、然レ
モ是レ大ニ然ラザルトナリ、ソクラチース氏ガ
死シタル後、プレート及ビ其他ノ學徒、アゼンス
人ノ哲學者ニ對シテ亂暴ノ舉動ヲナサシトヲ
恐レテ、一時メガラニ避ケシニ、ユークリッド氏ハ
丁寧ニ之ヲ待遇セリ、此ニ由テユークリッド氏ノ
ソクラチース氏ニ對シテ怨恨ナキヲ知ルベシ、
後、プレート氏及ビ其他ノ人モアゼンスニ歸ル
ルニ臨デ、ユークリッド氏ニ從テメガラニ留マリ
シ者モアリキ、

第四十節 ユークリッド氏ハツクラチース氏ノ
倫理論トエリア學派ノ一元論トヲ折衷シテ、以
爲ク、唯、一、ツ、ノ、變、化、セ、ザ、ル、モ、ノ、ア、リ、何、ゾ、ヤ、是、レ、
即チ善ナリ善ハ一ノミニアルニアラズ、或ハ之
ヲ智惠ト云ヒ、或ハ之ヲ神ト云ヒ、或ハ之ヲ道理
ト云ヒ、其他種々ノ名ヲ以テ之ヲ呼ベ、凡、其、實、一
ノミ、ニ、ア、ル、ニ、ア、ラ、ズ、即チ善ハ唯一ニシテ眞誠
ニ存在スルモノハ、此ニ外ナラザルナリ、若シ善
ニ反スルモノアラバ、ソレハ必ズ一種ノ現象ニ
シテ、永存シ難キモノナルベシト、是レユークリッ

ド氏ノ教ノ要旨ニシテ、ダイオヂニオニス、レヨル
シオス氏ノ傳ワル所ニ係ル、然ルニ右ノ言ニ由
テ之ヲ考フレバ、ユークリッド氏ノツクラチース
氏ノ學トエリア學トヲ混合セルヲ明ナリ、即
チ其善ト智惠トヲ同一視スルハ、ツクラチース
氏ニ本キ善ハ一ナリ、ニアルニアラズトスルハ、
エリア學派ニ本クナリ、

第四十一節 ユークリッド氏ヲ祖述セシ人ニハ

ユークリッド、ダイオドロス及ピアレキシノ
スアリ、皆辯證式ヲ以テ名アリ、リッテル氏曰ク、後

ソメガラ學派ノ人ハ、大抵反對論ヲ攻撃スルハ、
并ニ虛偽ヲハラシトシテ發見若クハ應用スルハ、
ニ於テ有名ナリシカバ、或ハツレカ為メニ辨證
家ト呼ビ做スモノモアリト、然レモ是等ノ人ハ
他人ヲ迷ハス爲メニ虛偽ヲ用ヒシニハアラズ
シテ、唯、粗忽ナル思想家ヲ教フル爲メニ用ヒシ
モノト見ユ、之ヲ要スルニ、右ノ人々ハ一種ノ科
學的ノ體系、サイエンスチック、システム若クハ
方法ヲ創立スルヲ務メズシテ、寧口思想上ノ
法式ヲ搜索スルヲニ從事セシナルベシト思ハ

ルハナリ、

シリシリン學派

第四十二節 シリシリン學派ノ首唱ハアリスチッポ
ス氏ナリ、之ヲシリシリン學派ト呼ブハ、氏ノ生レタ
ル地名ヲ取リテ然ク名ケタルナリ、フオン、スタイ
ン氏以爲ク、アリスチッポス氏ハ紀元前四百三十
五年ノ頃ニ生ルト、然レモ未ダ以テ確信スベカ
ラザルナリ、アリスチッポス氏ハ富有ニシテ且ツ
榮名アリシ兩親ノ子ニテ、發ニ奢侈淫逸ノ俗ニ
化セラレタリ、是レ蓋シ當時ニ一殖民地ノ通

弊ナリシガ故ナリ、然ルニ偶オリムビク遊戯ヲ
觀シガ爲メ希臘ニ來リ、始メテソクラチース氏
ノ演說ヲ聽キ、大ニ之ヲ喜ビ、巨額ノ金ヲ與ヘシ
カド、ソクラチース氏ハ之ヲ受ケザリキ、然レモ
直ニ其徒弟中ノ人トスルヲ承諾セリ、或ハ曰
フ、アリスチッポス氏ハ快樂ヲ好ミシガ故ニ、ソク
ラチース氏ハ之ヲ嫌ヒ、爲メニ師弟ノ間ニ不和
ヲ生ゼシト、是レ虚說ノミ、アリスチッポス氏ハソ
クラチース氏ガ死スルマデハ隨從シテ去ラザ
リキ、以テ師弟ノ間ニ不和ナカリシヲ察知スベ

キナリ、ソクラチース氏ノ死スルニ及デ、アリス
チッポス氏ハアゼンニスヨリオトヂナニ至リ、イ
ヂナヨリ又コリンニスニ至リ、コリンニスヨリ又亞
細亞ニ至リ、後再ビアゼンニスニ歸リシト云フ、
アリスチッポス氏ハ至テ多情ノ人ニテ、肉體上ノ
嗜好甚シカリシカド、亦之ヲ抑制スルノ力ヲモ
有セリ、實ニ氏ニアリテハ快樂ハ最大ノ目途ナ
レモ、能ク自己ノ願望ヲ節限スルノ法ヲ知レリ、
氏ノ人トナリハ、平和温順ニシテ、少シモ懊惱ス
ル如キ狀貌ヲ表ハサズ、而シテ邊幅ヲ修メズ、藩

西洋新學講義 卷之二
三十五
坡ヲ設ケズ、誠ニ磊々落落、意ニ爽々所ナカリキ、
曾テ亞細亞ニ至リ、波爾斯王ニツカヘシトアリ
シガ、一日王ノ出納ヲ管ルシノス氏極メテ富有
ナレ、凡取ルニ足ラザル人アリ、ス氏ニ其
家ヲ觀ルトヲ許ルセシトアリ、然ルニアリス夫
ホス氏ハ如何ナル處モ美麗ニシテ、整砌ニ至ル
マデモ皆然ルトヲ激賞シ、シノス氏ノ面ニ唾セ
シカバ、シノス氏ハ大ニ怒レリ、アリス夫ホス氏
呼テ曰ク、請フ恕セヨ、余ハ足下ノ面ヨリ外ニ唾
スベキ場所ヲ見出タサマ、リキト、其他種々ノ奇

話アレ、凡、煩ハシケルハ之ヲ省キ、氏少哲學ニ移
ラシトス、
第四十三節 且、アリス夫ホス氏ノ學ハ半ハソク
ラチ、トス氏ニ本クト雖モ、半ハ詭辨家ニ本クナ
ナリ、アリス夫トリトル氏ガアリス夫ホス氏ヲ詭
辨家ト呼ビ做シタルモ、亦之レガ爲メナリ、蓋シ
アリス夫ホス氏ハ純然タル詭辨家ニハアラズ
ト雖モ、詭辨家ト同ジク科學ノ確定ナラザルト
ヲ信ゼシト見エ、凡ソ外物ノ感覺ヲ起スヤ、人ニ
隨ヒテ同ジカラザルガ故ニ、眞理ノ標準ハ此ニ

由テ求メ難ク各自ハ唯其感觸スル所ニ由テ判
斷シ誰レ一人トシテ正シク判斷スル者ハアラ
ズト思惟セリ是レソノ詭辨家ニ本ク所ナリ然
レモ亦ソクラチイス氏ニ本テ唯倫理上ノコソ
ミヲ思索シ真理ノ標準ノ如キハ我ガ身上ニ就
テ求ムベキナリトシテ總ベテ物理的ノ思辨ヲ
ナスコトヲ屑シトセザリキ是レソノ詭辨家ニ異
ナル所ナリ且ツ夫レアリスチポス氏ハ人生ノ
目途ハ快樂ニ過ギズ外物ノ感覺ハ憑信スベカ
ラズト雖モ感覺ノ快不快ニ就テハ決シテ誤ア

ルコトナキガ故ニ真理ノ標準トスベキモノハ實
ニ快樂苦痛ノ感覺ニ外ナラズト思惟シ終身唯
快樂ヲ得ンコトヲ務メタリ是レ亦ソクラチイス
氏ノ道德ノ目途ハ幸福ニアリトセルニ本クナ
リ但ソクラチイス氏ハ人ノ追求スベキ幸福ハ
如何ナル幸福ナリト詳細ニ説カザリシカバア
リスチポス氏ハ一意ソレヲ肉體上ノ快樂ト定
ムテモクリトス氏ト同シク快樂主義ヘドニズ
ムヲ唱フルニ至レリ

第四十四節 アリスチポス氏ノ外シリン學派

ニ屬スル人ニハ、セオドロスヘゲシヤスアンニ
セリスノ諸氏アリ、皆唯快樂ノ定義ニ就キテ異
說ヲ立テタルノミ、即チ快樂ハ一時ノ快樂ナル
カ、將タ永續スル快樂ナルカ、或ハ又心意上ノ快
樂ナルカ、將タ肉體上ノ快樂ナルカ、或ハ又正面
ノ快樂ナルカ、將タ反面ノ快樂即チ苦痛ナキヲ
謂フナルカ、是等ノ問題ヲ起セシマデナリ、
セオドロス氏ハ總ベテ日常ノ間、自己ヲ合理的
ノ目途ヲシヨナル、ボルポースニ嚮向セシメ、隨
テ又一切ノ謬見謬信ヨリ離レシムベキ判斷、及

ビ力量ヨリ生ズル心意上ノ快樂ヲ以テ肉體上
ノ快樂ニ勝レリトス、ヘゲシヤス氏ハ又充分ノ
快樂ヲ得シトハ到底望ムベカラザルヲナレバ、
唯自己ノ能力ヲ盡シテ苦痛ヲ避ケンヲ求ム
ベシ、是レ實ニ聖人ノ務ムル所ニシテ、吾人ノ正
路ハ此ニ外ナラズ、何トナレバ、人生ハ苦痛ノミ
ナレバナリト思惟セリ、然ルニアンニセリス氏
ハ家族并ニ社會ヲ離ル、トハ決シテ能クスベ
カラザルヲナレバ、吾人ノ眞誠ナル目途ハ、得ラ
ルベキタケノ快樂ヲ得ルニアリ、然レモ亦國家

ノ爲ニ苦痛ヲ生ズルトモアルナレバ、苦痛ヲモ
受ケザルベカラズト、是レ全ク相反セル兩主義
ヲ調停セントスルニ似タリ、

犬儒學派

第四十五節 犬儒學派ノ首唱ハアンチステニ
―ス氏ナリ、氏ハ紀元前四百四十四年ニアゼン
スニ生ル、父ハアゼンス人ニシテ母ハスレシア
人ナリ、少キキタナグラノ戰爭ニ於テ勲功ヲ表
ハシ、後、詭辨家ノゴルヂヤス氏ニ就テ學ビ、自ラ
學校ヲ起スニ至リタレ、凡ソクラチ―ス氏ノ智

ノ實用ニ適セルニ服シ、教授ヲ廢シテ、再ビ學徒
トナレリ、帝ニコレノミナラズ、ソノ徒弟ニモ、已
ニ從ヒソクラチ―ス氏ノ許ニ至リ、眞誠ノ智ヲ
得ニテラ勸メタリ、此ノ時、アンチステニ―ス氏
ハ齡モ稍、高ク、説モ頗ル定マレリト雖モ、大ニ師
ノ言ヲ喜ビ、須臾モ其傍ヲ離レ去ルトナカリキ、
蓋シ氏ハ人トナリ嚴厲傲慢ニシテ温和ノ色ナ
ク、教ヲ立ツルモ亦嚴刻ニシテ、柔弱ノ風ヲ惡ム
ト甚シク、諂諛ヲ呈スル人杯ハ最モ忌ミ嫌ヘリ、
然レ、凡亦師ノ教ニ從ヒ、徳ヲ修ムルニ汲々トセ

り、然レ氏氏ノ徳トスル所、或ハ恐怖スベク、且ツ
 氏ノ呻吟スル状、犬ニ類スルヲアリシガ故ニ、大
 儒ト呼ビ做スニ至レリト云フ、
 アンチステニース氏ノソクラチース氏ニ隨從
 セシ氏尋常ノ習俗ヲ賤ミ、殊更ニ他人ト異ナラ
 シヲ務メ、敝衣ヲ披テ世人ニ誇示スルノ風ア
 リシカバ、ソクラチース氏彼レガ衣ノ破レタル
 處ヨリ窺ヒテ曰ク、アンチステニース氏吾レ汝
 ガ衣ノ破レタル處ヨリ汝ガ虚誇ノ心ヲ見ルト、
 此ニ由テアンチステニース氏ノソクラチース

氏ニ異ナルヲ知ルベキナリ、ソクラチース氏モ
 止ムヲ得ザル場合ニ逢フキハ、如何ナル寒熱ヲ
 モ厭ハスシテ、貧困ニ耐フルト雖モ、貧困ナル状
 態ヲ徳トスルニアラズ、然ルニアンチステニ
 ス氏ハ貧困ナルニアラザレバ、徳ハ修ムベカラ
 ザル者ノ如ク思惟シ、一囊一箝ヲ携ヘテ歩行シ、
 粗糙ナル衣服ニアラザレバ披ラズ、淡泊ナル食
 物ニアラザレバ食ハズ、而シテ髭モ亦唯、其長ズ
 ルニ任セ、言語動作ニ至ルマデ、皆其状貌ニ適合
 シテ、粗暴ニシテ、常ニ肉体上ノ快樂ヲ忌ミ嫌ヒ、

其淫逸ヲ取ランヨリ寧口瘋癲ヲ取ラント云ヘ
リ、此ニ由テアンチステニース氏ノ心推察スベ
キナリ、
其師死スルニ及テ、氏ハシノサルヂスト云ヘル
体操場ニ於テ學校ヲ設ケテ、徒弟ヲ教ヘタリ、其
教ノ旨意如何ント問フニ、氏ハソクラチース氏
ニ本テ人生ノ目途ハ徳ニ外ナラズ、徳ニ由ルニ
アラザレバ、真誠ノ幸福ハ得ベカラズトシ、且ツ
ソクラチース氏ノ如ク徳ハ學ブベク、教フベク
一ナルベシトセリ、然レ氏アンチステニース氏

ハ願望ヲ絶滅スルヲ以テ徳トシ、唯、富貴利達ノ
念ナキ者ノミヲ智者トセリ、實ニ非常ノ耐忍力
アルニアラザレバ、此ノ如キ教ヲ立テ、ソレヲ氏
ノ如ク實踐スル能ハズト雖モ、若シ氏ノ教ヲシ
テ社會ニ行ハレシメバ、社會ハ忽チ慘然タル景
況ヲ表ハサンノミ、

アンチステニース氏ハ晩年ニ至テ益峻嚴慘覈
ナリシカバ、徒弟之ニ耐フル能ハズシテ、皆離散
セリ、獨リダイオヂニース氏ノミ留マリテ師ニ
隨從シ、師ノ將ニ死セントスルニ當テ、ダイオヂ

ニース氏師ニ友人ヲ要スルカト問ヒシニ、師答
ヘテ友人能ク我が苦痛ヲ除クカトイヒシカバ、
乃チ之ニ又ヲ與ヘ、是レ能ク師ノ苦痛ヲ除クベ
シトイヒシニ、又答ヘテ吾レ唯、苦痛ヲ除カント
欲スルノミ、生命ヲ除カント欲スルニアラズト
イヘリ、
第四十六節 シノプノダイオチニース氏ハ銀
行ノ頭取ノ子ナリ、父貨幣ヲ惡クシ、為メニ罪ヲ
獲タリ然ルニ氏モ亦此事ニ關係ナキニアラザ
ルヲ以テ、アゼンスニ逃亡セリ、此ノ如ク富有ノ

地位ヨリ忽然貧窶ノ地位ニ移リシガ故ニ、恰モ
己レニ適セル所ノ哲學ヲ修メント欲シ、アンチ
ステニース氏ノ處ニ至リシニ、承諾セラレズ、然
レモ猶ホ犬儒學派ノ徒弟タラントヲ望ミシニ、
アンチステニース氏節多キ杖ヲ振り上ゲ、去ラ
ザレバ將ニ打タントスル有様ナリシカバ、ダイ
オチニース氏曰ク、打玉ヘ、先生決シテ余ノ耐忍
力ニ打勝ツホド堅固ナル杖ハ得玉ハザルベシ
ト、アンチステニース氏はニ於テカダイオチニ
ース氏ニ其徒弟タルコトヲ許セリ、

ダイオチニース氏ハ全ク肉体上ノ嗜欲ヲ去リ、恬淡ニシテ生命ヲ送ラシトシ、食物ハ少シバカリ食ヒ、食ヘバ必ず粗惡ナル食物ヲ取り、衣服ノ如キモ、決シテ美麗ナル者ヲ披ルコトナク、手ニ一囊一筇ヲ携ヘテ歩行シ、偶童子ノ手ヲ以テ水ヲ汲デ飲ムヲ見テ、椀ハ無用ナリトテ乃チ放棄シ、桶中ニ睡眠スルヲ以テ常トシ、食事及ビ其他衆人ノ前ニ於テナスベカラザルコトヲモナシテ少シモ憚ル色ナカリキト云フ、是レ蓋シ當時ノ人ガ奢侈華麗ヲ極ムルヲ惡ミ、ソレト反對ノ地位

ヲ取りテ、一世ヲ警醒スルノ意ニ出デタルコト思ハルマナリ、昔山王ニマテマテリシ右ノ外ダイオチニース氏ニ就テハ種々ノ奇行アレ氏皆世人ヲシテ驕奢遊蕩ノ外、別ニ高尚ニシテ且ツ純粹ナルモノアルコトヲ知ラシメシトスルノ意ニ出デタル者ノ如シ、然レ氏モ亦自己ノ耐忍力ヲ殊更ニ示サントスル傲慢心ナシトハ謂ヒ難キナリ、或ル時プレトト氏ガ友人ヲ招テ盛宴ヲナセシニダイオチニース氏招カレザレ氏其宴席ニ入り、美麗ナル敷物ヲ踏テ、吾レ

此ノ如クプレートトノ傲慢心ヲ蹈ムトイヒシニ、
プレートト氏答ヘテア、ダイオヂニトス、汝ハ猶
ホ一層甚シキ傲慢心ヲ以テスルカトイヒタリ、
又或ル時歴山王從者ト共ニダイオヂニトス氏
ノ處ニ到リ、余ハ歴山王ナリトイヒシニ、余ハ犬
儒ダイオヂニトスナリト答ヘタリ、王又汝何ノ
望ム所アリヤト問ヒシニ、余ハ唯、王ノ日光ヲ遮
ラザラントヲ望ムノミト答ヘタリ、王是ニ於テ
カ歎ジテ曰ク、若シ我レ歴山王ニアラザリシナ
ラバ、ダイオヂニトスタランヲ欲スト、又或ル時

ダイオヂニトス氏王ノ前ニ伴ハレテ來リシニ、
汝誰レナリヤト問ハレシカバ余ハ汝ノ貪慾ヲ
間諜スル者ナリト答ヘタリ、其大膽ナル率子此
ノ如シ、又或ル時氏白晝ニ「ラン」ヲ携ヘテ、市街
ヲ逍遙シテ、何カ搜索スル所アルガ如シ、因テ氏
ニ何ヲカ搜索スト問ヒシニ、人ナリト答ヘタリ、
蓋シ真誠ニ人ノ人タル本分ヲ盡ス者少キガ故
ニ、斯クイヒテ時人ヲ諷刺セシナラン、氏又常ニ
時人ヲ訾リテ、丈夫ハ獨リモナシ唯、スバルタニ
テハ小兒ヲ見、アゼンスニテハ婦人ヲ見シノミ

トイヘリ、一日衆人來レト呼ハリシカバ、忽チ來ル者アリキ、然ルニ棒ヲ執リテ之ヲ擊テテ曰ク、我レ人ヲ呼ビシノミ、汝ノ如キハ屎ノミト、亦是レ儆戒ノ意ヲ寓スルニ外ナラザルナリ、
第四十七節 既ニ第三十八節ニモ陳述シタルガ如ク、メガラシリシ及ビ犬儒ノ三學派ハ、皆ソクラチス氏ニ本キ、徳ヲ修ムルヲ及々トシテ務メタレ氏、惜カク、各一方ニ偏向シ、反テ弊害ヲ生スルニ至レリ、即チメガラ學派ハ、辯論ニ流レ、後、變ジテ懷疑學派トナル、シリシ學派ハ、放縱

ニ傾キ、後、變ジテエピキユロス學派トナル、犬儒學派ハ、峻刻ノ一偏ニ局シ、後、變ジテストア學派トナル、之ヲ支那ノ哲學家ニ比スルニ、メガラ學派ハ、公孫龍子ニ近シ、公孫龍子ガ白馬非馬ノ論、堅白異同ノ辨ノ類、皆イハユル辨證式ニ由ルヲ以テ之ヲ知ルベシ、惠子鄧析子モ皆同一流ノ人物ナレバ、此三人ヲ一派トシテメガラ學派ニ比スベキナリ、シリシ學派ハ、楊子ニ近シ、楊子曰ク、百年壽之大、齊得百年者、千無一焉、設有一者、孩抱以逮昏老、幾居其半矣、夜眠之所弭、晝覺之所遺、又

幾居其半矣、痛疾哀苦、亡失憂懼、又幾居其半矣、量
十數年之中、迫然而自得、亡介焉之慮者、亦亡一時
之中爾、則人之生也、奚爲哉、奚樂哉、爲美厚爾、爲聲
色爾、而美厚復不可常厭足、聲色不可常翫聞、乃復
爲刑賞之所禁勸、名法之所進退、遑遑爾競、一時之
虛譽、規カ死後之餘榮、偶偶爾慎耳目之觀聽、惜身意
之是非、徒失當年至樂、不能自肆於一時、重囚累梏、
何以昇ト哉、太古之人、知生之暫來、知死之暫往、故從
心而動、不違自然、所好當身之娛、非所去也、故不爲
名所勸、從性而游、不逆萬物、所好死後之名、非所取

也、故不爲刑所及、名譽先後、年命多少、非所量也、(列
子揚朱篇)ト、是レシリニ學派ノ快樂ヲ得ルヲ以
テ人生ノ目途トスルト異ナラサルナリ、大儒學
派ハ老子ニ近シ、老子曰ク「不尚賢、使民不爭、不貴
難得之貨、使民不爲盜、不見可欲、使心不亂」(老子三
章)ト、又曰ク「五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令
人口爽、馳騁田獵、令人心發狂、難得之貨、令人行妨、
(全十二章)ト、又曰ク「見素抱樸、少私寡欲」(全十九章)
ト、又曰ク「聖人去甚、去奢、去泰」(全二十九章)ト、是レ
大儒ガアゼンス人ニ對シテ反對ノ地位ヲ取リ

タルト同シク、周末ノ時勢ニ對シテ反對ノ地位ヲ取り、以テ此ノ如キ教ヲ立テタルナリ、之ヲ要スルニ、メガラシリシ及ビ大儒ノ三學派ハ、皆ソクラチーヌ氏ノ教ヲ大成スルヲ能ハザリキ、此ノ時ニ當テ、プレートト氏起リテソクラチーヌ氏ノ教ヲ繼述シ、各學派ノ分受スル所ヲ一點ニ集合シ、以テ希臘哲學ヲ一變スルニ至レリ、

明治十六年四月二十七日版權免許

講述并 福岡縣平民 井上哲次郎

東京麴町區富士見町五丁目六番地

東京府平民

發兌人 阪上 半七

東京日本橋區吳服町十二番地



弘通書肆

大坂 梅原龜七

同 岡島真七

西京 村上勘兵衛

同 大黒屋太郎右衛門

名護屋 片野東四郎

東京 北畠茂兵衛

同 稻田佐兵衛

同 丸家善七

同 北澤伊後八
吉川半七

開崇十六年四月二十七日



